

## シンポジウム III : つながりを創る特色ある臨床検査技師教育

## 1. 司会のことば

齋藤 邦明\*

〔Key Words〕臨床検査技師教育、医療専門職教育

本シンポジウムでは、松下学術大会長のご提案により、異なった立場である専門学校/短期大学、大学、大学院がつながりを作り、如何に医療専門職としての有能な臨床検査技師を育成するかについて議論した。各機関それぞれの、特色ある教育がもたらす多様性を生かし、臨床検査技師教育を発展させようとした大変ユニークな試みであった。

現在、厚生労働省を中心として医療職の指定規則改定が議論されており、本企画は臨床検査技師指定規則、さらには教育のあり方について参考になる極めて有意義なものであった。

シンポジウムの司会は、学術大会長のご指名により、川崎医療福祉大学の永瀬澄香先生と私で務めさせていただいた。シンポジストには、夜間定時制の臨床検査技師教育の観点から、京都保健衛生専門学校の小澤 優先生、特定専攻科を設置している観点から高知学園短期大学の富永麻理先生、4年制大学での承認校と指定校に関する問題点の提起について神戸常盤大学の坂本秀生先生、大学院における臨床検査技師職能教育の意義について加藤優子先生にそれぞれの立場からご講演いただいた。

詳細な内容については、それぞれの先生方から執筆していただくこととするが、ご講演はどれも内容の濃いものばかりであった。前半の講演では、

臨床検査技師教育の中でも数少なくなった夜間定時制で臨床検査技師の国家試験受験資格が得られることの意義、また短期大学で特例適用専攻科を設置されている施設での熱い想いについてもお聞きすることができた。また、4年制大学の教育に関しては、現在、指定校と承認校の2つのわかりにくい制度上の問題点を整理し、解説していただいたので、指定規則を如何に改訂すべきかの道筋となった。さらに、大学院における職能教育についても今回議論できたことは大変有意義であった。大学院では、病院、企業の将来の管理者となる人材養成のみならず、日本の科学技術を支える人材の輩出が責務となっている。

本シンポジウムでは、大学院教育の中で病院と連携して、ライセンスを活用した大学院実践教育のあり方と方向性について一例として提示いただいた。歴史は繰り返すと良く言われるが、例えば医師、薬剤師にしても最初は医専、薬専の時代を経て、現在の教育システムが出来ている。それらに比較すると未だ歴史の浅い臨床検査技師教育は、今ようやく4年制の大学教育が主流となり、さらには高度な大学院教育が始まったばかりである。他の医療職で実践されている良いシステムはできる限り短時間で取り込み、将来に向かって発展できる臨床検査教育プログラムができることが望ま

\*藤田保健衛生大学大学院 保健学研究科 医療科学専攻/日本臨床検査学教育協議会 副理事長 saitok@fujita-hu.ac.jp

れる。今回のシンポジウムはどの講演も議論の時間が充分ではなかったくらい盛り上がった。

臨床検査技師教育の多様性と有能な人材を育成するために様々な議論ができたことは大変有意義

であった。学術担当の副理事長として、シンポジウムを企画いただいた学術大会長、当日ご講演いただいた諸先生各位、シンポジウムに参加いただいた皆様に深謝申し上げます。